

# 米国 Reading 教科書と英語 Graded Readers の 英語初級者向けコーパスデータとしての適性に関する研究

中條清美\*, 西垣知佳子\*\*, 山保太力\*\*\*, 落合太一\*\*\*\*

## Identifying the Suitability of American Reading Textbooks and English Graded Readers for Beginner-level Corpus Data

*Kiyomi CHUJO\**, *Chikako NISHIGAKI\*\**, *Motoyoshi YAMAHO\*\*\**  
and *Taichi OCHIAI\*\*\*\**

Although the use of corpora has steadily expanded in the study of linguistics, lexicography and translation, the applications of corpus use in L2 classrooms has been less applicable. Concordancing tools are often complex, requiring teachers and students to grapple with the hardware, software and grammatical target language. In addition, retrieved concordance lines from foreign language corpora are difficult for L2 students to understand. In order to develop more user-friendly L2 corpora, this study will examine the reading grade level and word familiarity grade level of American Reading textbooks from grades 1 to 3 and English graded readers allotted the Yomiyasusa Level (YL) from 0.0 to 4.0. It aims to provide a collection of texts with rated difficulty level scores that may be particularly useful for beginner level English learners such as Japanese secondary school students and Japanese college remedial level students. It is hoped that using corpora that are more appropriate with regard to proficiency level may take corpus usage one step closer to its ideal application.

Keywords: American Reading Textbooks, English Graded Readers, Readability, Grade Level, Corpus

### 1. はじめに

コーパスを活用した学習はデータ駆動型学習 (data-driven learning, 以下 DDL) と呼ばれ, ターゲットとする語句のテキスト中での使用例を多数, 閲覧, 観察して, 学習者自身が文法規則や語彙の意味・用法等を発見して学習する帰納的な学習方法として用いられる (Johns, 1991)<sup>1)</sup>. DDL は学習者中心の指導法であり, 言

語データの観察をとおして言語に関する学習者の気づきを導き, 自律的な学習活動を促す。この結果, 動機付けと学習効果が増すと考えられている (Stevens, 1991; Johansson, 2009)<sup>2),3)</sup>。しかしながら, コーパスを英語教育に活用しようという試みは, コーパス検索ツールの操作性の問題や, コーパステキストの難易度の問題などいくつかの壁があるため, 教育への導入例は世界的に見てもまだ多くない (Braun, 2005; Breyer, 2006; Breyer, 2009; Granath, 2009; Boulton, 2010; Oghigian and

\* 日本大学生産工学部教養・基礎科学系准教授

\*\* 千葉大学教育学部教授

\*\*\* 日本大学大学院生産工学研究科博士前期課程教理情報工学専攻2年

\*\*\*\* 千葉大学大学院教育学研究科修士課程教科教育科学専攻1年

Chujo, 2010; Anthony, Chujo and Oghigian, 2011<sup>a</sup>; Nishigaki, Amano, Minegishi, and Chujo, 2011)<sup>4)~11)</sup>。

コーパス検索ツールについては、最近、British National Corpus (BNC)<sup>#1)</sup>, Exemplar<sup>#2)</sup>, the Corpus of Contemporary American English (COCA)<sup>#3)</sup>, the Professional English Research Consortium (PERC)<sup>#4)</sup>などの、“4th-generation” (Anthony, Chujo and Oghigian, 2011<sup>b</sup>)<sup>12)</sup>と呼ばれる大規模コーパスに基づくウェブ上の英語モノリンガル検索サイトが容易に利用可能となり<sup>#5)</sup>、これらを利用した教育実践も見られるようになった (Oghigian and Chujo, 2010; Oghigian and Chujo, 2012)<sup>13),14)</sup>。

一方、上述のBNC, Exemplar, COCA, PERCなど検索用に使われるコーパスの多くは、研究目的で構築され、成人母語話者の書きことばにもとづいて作成されているため、英語上級者向けであり、そのまま英語初級者や英語中級者を対象とした教育現場で利用しようとする、検索結果の英文テキストが、トピックや語彙の点で難しすぎたり、また、1文が長すぎたりするため、教材として機能しないことが指摘されている (Allan, 2009: 24-25; Breyer, 2009: 165)<sup>15),16),#6),#7)</sup>。教育効果の期待されるDDLを教育現場に導入するためには、学習者の英語の習熟度に適した英文テキストデータを提示する必要がある。

こうしたDDL導入の障碍となっている英語コーパステキストの難易度に関する基礎的研究として、我々はコーパステキストの英文と学習者の英語レベルのギャップについて調査してきた。中條・白井・内山・西垣・長谷川 (2004)<sup>17)</sup>, Chujo, Utiyama, and Nishigaki (2007)<sup>18)</sup>は、英語コーパステキストの難易度を推定する指標として、「単語の長さ」と「リーダビリティ」が適していることを報告した。また、Chujo and Utiyama (2006)<sup>19)</sup>では、上述の2指標の他に、英語母語話者の語彙習得学年資料を用いる方法もテキストの難易度を推定する指標として有効であることを検証している。そしてこれらの研究から、ウェブ上で公開されているコーパスの中から、日本人の初級英語学習者に適した英語レベルのコーパステキストを見つけることは容易ではないことが報告された。

そこで、中條・西垣・山保・天野 (2011)<sup>20)</sup>では、学習者の習熟度レベルを考慮して作成されたテキストデータとして、英語教科書中の英文テキストに着目し、日本をはじめ中国、韓国、台湾の東アジア学校英語教科書に出現する英文テキストを収集して、それらのテキストの難易度を調査した。学校英語教科書中の英文は、実際の言語使用に基づいたものではないため、本来コーパスが強みとする「真正性 (authenticity)<sup>21)</sup>」という点ではBNCやCOCA等のコーパスには劣る。しかし、語彙や文構造

を綿密にコントロールして編集されているので、学習者の英語力レベルに配慮された言語データであり、初級英語学習者のための優れた指導用言語データであると考えられた。

中條他 (2011)<sup>22)</sup>では、日本・中国・韓国・台湾の中・高英語検定教科書34冊と、小説などの公開されている散文35編の英文テキストについて、「読書学年」と「語彙習得学年」という2つの指標を用いて英文テキストの難易度を調査した。両者の詳細については後述するが、読書学年は英文の読みやすさを示す英語リーダビリティの公式から得られる指標であり、語彙習得学年は英語母語話者の語彙習得学年資料を参照して得られる指標である。調査は難易度レベルをI~IVの4段階に分けて行った。4段階のレベルとは、読書学年および語彙習得学年の結果から得られたデータに基づいて、英語教師や学習者にわかりやすいように日本の学校教科書を基準にしてレベル分けを行ったもので、レベルI:日本の中学教科書修了レベル、レベルII:日本の高校教科書「英語I・II」修了レベル、レベルIII:日本の高校教科書「英語Reading」修了レベル、レベルIV:それ以上の英語レベル、であった。

調査の結果、(1)読書学年と語彙習得学年のいずれの指標を用いてもそれぞれの基準にもとづいてテキストの難易度別の分類が可能である、(2)レベルI(中学校教科書修了レベル)の学習者に使用可能なテキストは非常に少ない、(3)レベルII(高校「英語I・II」を修了したレベル)の学習者には、調査した東アジアの英語教科書テキストのほぼ8割が使用可能圏内である、(4)レベルIII(高校「英語Reading」を修了したレベル)の学習者は、東アジア英語教科書の96%、散文の5割強が使用可能であることが判明した。調査した日本・中国・韓国・台湾の英語教科書テキストは日本の高校教科書を修了した学習者の習熟度レベルに比較的合致したテキストと言える。一方、中学校教科書修了レベルの学習者に使用可能なテキストは少ないことも明らかになった。このことから初級者に対してDDLの指導を行うには、日本・中国・韓国・台湾の教科書に加えて、レベルIを補い、レベルIIをさらに充実させるような言語データが必要である事が判明した。

これまで、筆者らは、大学生や大学院生の指導でDDLの指導効果を確認し (中條・内堀・西垣・宮崎, 2009; 西垣・中條・木島, 2010)<sup>23),24)</sup>、その成果を踏まえて、中学生、高校生の語彙・文法指導にDDLを応用したいと考え、教材開発と実践研究をスタートした (西垣・天野・吉森・中條, 2011; 西垣・峰岸・中條, 2012)<sup>25),26)</sup>。

本研究では、中学校教科書修了から高校「英語I・II」を修了した者を英語初級学習者ととらえる<sup>#8)</sup>。そして初級者向けコーパス構築の際に課題となる英語コーパス

キストの難易度の問題を解決するため、レベル I（中学校教科書修了レベル）、レベル II（高校「英語 I・II」を修了したレベル）を強化し、より広範なデータを網羅する基礎資料（参考データ）を得るという目的で、米国 Reading 教科書と graded readers の英文テキストの難易度の調査を行った。これらを調査対象とする理由は、graded readers のコーパス化と海外の小学校レベルの教科書等をコーパスデータとして用いることが投野 (2003)<sup>27)</sup>において、提案されていること、また、graded readers はある程度真正な言語的特徴を含んでいるという研究結果を Allan (2009)<sup>28)※9)</sup>が報告していることが挙げられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、教育的視点にもとづいた英文の難易度判定として実績のある、1) 英語リーダビリティ公式による読書学年、2) 英語母語話者の語彙習得学年、という 2 つの指標を用いて、米国 Reading 教科書の初級学年（1, 2, 3 年）、graded readers（読みやすさレベル 1～4）の英文テキストの難易度レベルを計測することであった。さらに、その結果を、中條他 (2011)<sup>29)</sup>で調査した日本・中国・韓国・台湾の中・高英語検定教科書テキストと、ウェブ上で公開されている散文テキストの指標の難易度と比較して、米国 Reading 教科書と graded readers の英語初級者向けコーパステキストとしての適性を確認することであった。本研究の成果は、コーパスを活用した英語初級者向けの DDL 教材を開発する際の基礎的研究資料となるものである。

## 3. 研究の方法

### 3.1 使用したテキスト

#### 3.1.1 米国の Reading 教科書

調査には、米国で使用された小学校 Reading 教科書 (grade 1, grade 2, grade 3) を計 9 冊収集した。1, 2 年生用の教科書の本文を手入力し、校正し、3 年生用はスキャナーで入力、手入力で校正を行った。教科書は、カリフォルニア州の公立小学校を中心にして使用されている米国の Houghton Mifflin 社の *Houghton Mifflin Reading* を選択した。

使用した Reading 教科書の学年とタイトルは以下のとおりである。著者、出版社、出版年等の詳細は Appendix に記した。

#### ① Grade 1

Houghton Mifflin Reading 1-1 *Here We go!*  
Houghton Mifflin Reading 1-2  
*Let's Be Friends*

Houghton Mifflin Reading 1-3 *Surprises*  
Houghton Mifflin Reading 1-4 *Treasures*  
Houghton Mifflin Reading 1-5 *Wonders*

#### ② Grade 2

Houghton Mifflin Reading 2-1 *Adventures*  
Houghton Mifflin Reading 2-2 *Delights*

#### ③ Grade 3

Houghton Mifflin Reading 3-1 *Rewards*  
Houghton Mifflin Reading 3-2 *Horizons*

### 3.1.2 Graded readers

Graded readers の収集には、多読用の洋書の「読みやすさレベル」(古川・神田, 2007)<sup>30)</sup>を基準とした。読みやすさレベル (Yomiyasusa Level, 以下 YL) とは、「SSS 英語学習法研究会が独自に定めた日本人の大人にとっての読みやすさレベルで、数値が小さいほど一般的に読みやすいことを表す」とされる<sup>※10)</sup>。Graded readers の読みやすさレベルは YL 0.0 から YL 10.0 の範囲に分布し、YL 1.1-1.9 まだが「レベル 1 の本」などと呼ばれる。この YL は SSS が独自に付与しているものであるため、他の言語資料との難易度の比較には使用できない。そこで本研究では、統一した基準で計測し、統一した指標によってさまざまな資料の難易度を比較する必要があった。

本研究では、英語初級者向けに使用可能なテキストを収集してそれらの難易度を調査するということを念頭において、YL 0.0 から 4.0 の範囲内に評価される graded readers を、Oxford Bookworms や Penguin Readers などのシリーズごとにランダムに収集した。テキストの分量は、固有名詞等を除去後に、テキストの延べ語数が 1,500 語以上残るように、YL 別に次のように調整した。YL 0 は 1 冊ごとの語数が少ないため、シリーズごとにランダムに複数冊を選び出して、合計延べ語数が 2,000 語程度になるように収集した。YL 1 以上のテキストは YL 別、並びにシリーズ別に収集したものから各 1 冊をランダムに選び、テキストの冒頭から 2,000 語分を分析対象とした。YL 0 の本文の英文は人手で入力し、YL 1 から YL 3 はスキャナーを使用して入力し、人手で校正を行った。

使用した graded readers のシリーズ名と分析に使用したテキストのタイトル例は、YL 別に以下のとおりである。著者、出版社、出版年等の詳細は Appendix に記した。

#### ① YL 0

Oxford Reading Tree Stage 4  
*House for Sale*, 他 11 冊  
Longman Literacy Land Story Street Step 4  
*Billy's Baby*, 他 8 冊  
Oxford Dolphin Readers Level 2  
*Double Trouble*, 他 7 冊

- Puffin Easy-to-Read Level 1  
*How Big Is Big?* 他 7 冊
- Oxford Reading Tree Stage 5  
*A New Classroom*, 他 4 冊
- Oxford Dolphin Readers Level 3  
*Students in Space*, 他 5 冊
- Cambridge Storybooks 3  
*Dad Goes Fishing*, 他 5 冊
- Puffin Easy-to-Read Level 2  
*Hamster Chase*, 他 3 冊
- ② YL 1  
Puffin Easy-to-Read Level 2  
*Young Cam Jansen and the Baseball Mystery*
- Puffin Easy-to-Read Level 2  
*What a Trip, Amber Brown*
- Oxford Bookworms Factfiles Stage 1  
*Kings and Queens of Britain*
- Oxford Bookworms Factfiles Stage 1  
*Scotland*
- ③ YL 2  
Oxford Bookworms Library Stage 1  
*Sherlock Holmes and the Sport of Kings*
- Penguin Readers Level 2  
*Mr Bean in Town*
- Cambridge English Readers Level 2  
*Logan's Choice*
- Oxford Bookworms Library Stage 2  
*Return to Earth*
- ④ YL 3  
Oxford Bookworms Library Stage 3  
*Chemical Secret*
- Penguin Readers Level 3  
*Emil and the Detectives*
- Penguin Readers Level 3  
*Dangerous Game*
- Oxford Bookworms Library Stage 4  
*The Thirty-Nine Steps*

### 3.1.3 参考資料 1：日本・中国・韓国・台湾の学校英語教科書

本研究で調査した米国 Reading 教科書および graded readers と、英文テキスト難易度レベルを比較するために、参考資料として以下の日本と東アジアの教科書を使用した。なお、これらの参考資料は、中條他 (2011)<sup>31)</sup>で収集・分析されたものである。

- ① 日本  
中学：*New Horizon English Course 1, 2, 3*  
高校：*Unicorn English Course I, II, Reading*
- ② 中国

中学：英語 (新標準) 初中一年級，二年級，三年級，各上・下冊

高校：普通高中課程標準實驗教科書第一冊～第五冊

#### ③ 韓国

中学：*Middle School English 1, 2, 3*

高校：*High School English I, II*<sup>#11)</sup>

#### ④ 台湾

中学：國民中學英語課本 *English 1, 2, 3*, 各上・下

高校：遠東新高中英文 (一)～(六)

### 3.1.4 参考資料 2：散文

3.1.3 とともに、参考資料として以下の①と②の散文のデータを使用した。①「日英対訳文対応付けデータ」(内山・高橋, 2003)<sup>32)</sup>より 32 編の古典的な小説や最近のコンピュータ関連のエッセイなどから構成されている英語テキストと②「日英新聞記事対応付けデータ」(内山・井佐原, 2003)<sup>33)</sup>から抽出した 3 サンプルの *The Daily Yomiuri* 英語テキストであった。なお、これらの参考資料は、Chujo, et al (2007)<sup>34)</sup>で収集・分析されたものである。

### 3.2 調査方法

得られた分析結果を先行研究と比較できるように、調査は Chujo, et al (2007)<sup>35)</sup>, 中條他 (2011)<sup>36)</sup>と同一の方法を用いた。すなわち、英文テキストの難易度を客観的に推定できる指標として、1) 英語リーダビリティ公式による読書学年, 2) 英語母語話者の語彙習得学年の 2 種類の指標を用いた。なお、2 つの指標によるスコアを正確に算出するため、すべての英文テキストから人手で固有名詞, 数字, 略語等を取り除いた<sup>#12)</sup>。

#### 3.2.1 読書学年 (リーダビリティ)

リーダビリティは、「文章を読みやすくする要因, すなわち単語の難易, 単語の長さ, センテンスの長さなどの要因を組み合わせ, 公式に代入して計算し, その数字を読書学年レベルとするものである」と定義されており<sup>37)</sup>, 算出結果は、通常、米国における生徒の読書能力を学年で表示した「読書学年レベル (reading grade level)」を予測する数値で表される。たとえば、リーダビリティ・スコアの「8.0」は米国の 8 年生の生徒がその文書・読み物を理解できることを意味する<sup>#13)</sup>。

中條他 (2004)<sup>38)</sup>では、リーダビリティを算出するソフトウェアの 1 つである Readability Calculations<sup>39)</sup>で算出される 9 種類の公式について、リーダビリティ・スコアの計算に用いた要因、各公式に推奨されている最適対象学年、および 9 種類の公式を適用した読書学年レベルの算出結果を照合して検討し、Flesch-Kincaid Formula<sup>40)</sup>, SMOG Formula<sup>41)</sup>, Fry Graph<sup>42)</sup>の 3 指標がリーダビリティの予測に適切であることを報告した。本研究では、中條他 (2011)<sup>43)</sup>においてこれらの 3 指標を試用した結果にもとづいて、読書学年を安定して算出し

た Flesch-Kincaid Formula を用いることにした。Flesch-Kincaid Formula は「語数, シラブル数, 文数」の要因を組み合わせることで読書学年を算出する公式であり, 国内外の多くの研究で英文の読みやすさを示す指標として用いられている。

### 3.2.2 語彙習得学年

語彙習得学年は, 英語母語話者の語彙習得学年資料を調査した *The Living Word Vocabulary* (Dale and O'Rourke, 1981)<sup>44)</sup>に基づいて算出した。この調査資料は, 米国の4~16年生の生徒が基本的な語の意味を理解する学年を40,400項目にわたって調査したもので, 米国の半数以上の生徒が当該単語の意味を理解できる学年が示されている。ただし, 最低学年レベルが4年生になるため, 本研究では4年生以下を1年から4年の学年に細分する資料として Harris and Jacobson (1972)<sup>45)</sup>の *Basic Elementary Reading Vocabularies* を使用した。両資料に含まれない語は17年生として計算した<sup>44)</sup>。両資料は調査年代が古いので, 2000年代の英語テキストの難易度を測定するには理想的な資料とは言えないかもしれない。しかしながら, Hiebert (2005)<sup>46)</sup>も指摘するように, 包括的に米国の生徒の語彙習得学年を調査した信頼性のある資料は残念ながら他にない。そこで, 本研究では, 3.2.1のリーダビリティによる読書学年の計測結果と語彙習得学年をあわせて, 2つの異なる教育的視点から英文テキストの難易度レベルの観察を行うこととした。

## 4. 結果と考察

本稿では, 日本人の英語初級学習者に使用可能な難易度レベルのコーパステキストにどのようなものがあるのかを調査するため, 先行研究(中條他, 2011)<sup>47)</sup>と比較可能なデータを蓄積する目的から, 先行研究と同様の **Table 1** に示した4段階のレベルを使用した<sup>45)</sup>。Table 1には, 日本の学校教科書を基準として, レベルIをホワイト, レベルIIを薄グレー, レベルIIIを濃グレー, レベルIVをブラックの4段階に分けて, 読書学年と語彙習得学年を分類して示した。以下では Table 1 のように, 色分けしたスコア表示を行う。

読書学年と語彙習得学年はともに単位は「(米国の) 学年」であるが, 上述したように別個の基準に基づく指標

である。各々の指標内でのスコアの整合性は取れているが, 互いのスコアの表示範囲は異なる。そのため, 同じサンプルに対する両指標のスコアは, 同じ数値を表示するとは限らない。

高校教科書を「英語 I・II」と「英語 Reading」に分けるのは以下の理由による。中條・長谷川・西垣 (2008)<sup>38)</sup>の調査では, 同一の名前を持つ英語教科書シリーズ35シリーズ中11種が「英語 I・II」から成り, 他の24種は「英語 I・II・Reading」から構成されていた。大学進学者数の多くない高校では「英語 I・II」で修了する場合もあり, 「英語 I・II」が一つの区切りと考えられる。また, 進学者数の多い高校では「英語 I・II・Reading」を使用することが多いが, 「英語 I・II」と「英語 Reading」との間には, 大幅に語数, レベル差のあるものが多いことから「英語 I・II」と「英語 Reading」を分けて, 「英語 I・II」と「英語 Reading」修了時をそれぞれ1つの区分として分けて取り扱うことは妥当と考えられた。

**Table 2**には, 米国 Reading 教科書の各学年テキストと graded readers の各テキストサンプルについて, 読書学年と語彙習得学年のスコアを示した。どちらも単位は「(米国) 学年」である。

Table 2には, 参考データとして各教科書あるいは各テキストサンプルの異語数, 延べ語数も示した。タイトルは学年, あるいは YL のスコアにしたがって低いものから高いものの順に示した。Table 2 の読書学年と語彙習得学年の列を Table 1 の段階区分に従い, レベル I, II, III, IV に分類して, 色別に表示した。

Table 2 上段の米国 Reading 教科書の結果を見ると, 読書学年は0.1~2.7, 語彙習得学年は2.2~4.6の間に分布しており, 両者のレベル分けは, 1年生と2年生の教科書では白(レベルI)と薄グレー(レベルII)に評価された。一方, 3年生の教科書では, 読書学年は薄グレー, 語彙習得学年は濃グレー(レベルIII)という評価であった。3年生では評価に不一致が見られたものの, レベル分けの結果を俯瞰すると, 読書学年と語彙習得学年の結果では同じ傾向にあるように見える。そこで両指標の相関係数を求めたところ  $r=0.82$  であり, 両指標には高い相関があることが確認できた。したがってどちらの指標を用いても難易度の判別結果が似たものとなると言える。

次に Table 2 下段の graded readers の結果を見ると,

**Table 1** Overview of Level Definitions

レベル	日本の教科書レベル資	読書学年	語彙習得学年
レベル I	日本の中学校教科書修了レベル	US reading grade 1.3 以下	US grade 2.5 以下
レベル II	日本の高校「英語 I・II」修了レベル	US reading grade 1.4~5.5	US grade 2.6~3.9
レベル III	日本の高校「英語 Reading」修了レベル	US reading grade 5.6~6.5	US grade 4.0~5.0
レベル IV	日本の高校「英語 Reading」修了レベル以上	US reading grade 6.6 以上	US grade 5.1 以上

**Table 2** The Reading Grade Level and Word Familiarity Grade Level of Each Textbook and Text Collection

米国 Reading 教科書						
学年	シリーズ	タイトル	異語数	延べ語数	読書学年	語彙習得学年
1	Houghton Mifflin Reading 1-1	Here We Go!	335	1,618	0.6	2.2
	Houghton Mifflin Reading 1-2	Let's Be Friends	409	2,523	0.1	2.2
	Houghton Mifflin Reading 1-3	Surprises	508	3,252	0.9	2.7
	Houghton Mifflin Reading 1-4	Treasures	677	4,384	1.4	2.6
	Houghton Mifflin Reading 1-5	Wonders	731	5,325	1.7	2.6
2	Houghton Mifflin Reading 2-1	Adventures	1,664	14,804	2.7	3.7
	Houghton Mifflin Reading 2-2	Delights	1,765	17,469	2.6	3.9
3	Houghton Mifflin Reading 3-1	Rewards	2,275	20,996	2.1	4.4
	Houghton Mifflin Reading 3-2	Horizon	2,754	29,843	2.2	4.6
Graded Readers						
YL	シリーズ	タイトル	異語数	延べ語数	読書学年	語彙習得学年
0	Oxford Reading Tree Stage 4	House for Sale, 他 11 冊	224	1,478	0.1	2.2
	Longman Literacy Land Story Street Step 4	Billy's Baby, 他 8 冊	301	1,399	0.2	1.9
	Oxford Dolphin Readers Level 2	Double Trouble, 他 7 冊	268	1,445	0.4	2.1
	Puffin Easy-to-Read Level 1	How Big Is Big?, 他 7 冊	289	1,485	0.6	2.1
	Oxford Reading Tree Stage 5	A New Classroom, 他 4 冊	176	1,372	0.2	1.8
	Oxford Dolphin Readers Level 3	Students in Space, 他 5 冊	317	1,586	0.5	2.2
	Cambridge Storybooks 3	Dad Goes Fishing, 他 5 冊	257	1,436	0.3	2.2
	Puffin Easy-to-Read Level 2	Hamster Chase, 他 3 冊	281	1,418	0.1	2.0
1	Puffin Easy-to-Read Level 2	Young Cam Jansen and the Baseball Mystery	222	1,363	0.1	1.8
	Puffin Easy-to-Read Level 2	What a Trip, Amber Brown	376	1,592	1.1	2.8
	Oxford Bookworms Factfiles Stage 1	Kings and Queens of Britain	220	1,576	2.2	1.7
	Oxford Bookworms Factfiles Stage 1	Scotland	289	1,615	4.2	2.4
2	Oxford Bookworms Library Stage 1	Sherlock Holmes and the Sport of Kings	293	1,773	3.0	2.0
	Penguin Readers Level 2	Mr Bean in Town	258	1,907	2.5	2.1
	Cambridge English Readers Level 2	Logan's Choice	372	1,761	2.7	2.2
	Oxford Bookworms Library Stage 2	Return to Earth	351	1,956	4.0	2.4
3	Oxford Bookworms Library Stage 3	Chemical Secret	395	1,877	3.0	2.3
	Penguin Readers Level 3	Emil and the Detectives	390	1,835	3.5	2.1
	Penguin Readers Level 3	Dangerous Game	321	1,974	2.4	2.1
	Oxford Bookworms Library Stage 4	The Thirty-Nine Steps	398	1,909	3.1	2.3



レベル I : 日本の中学校教科書修了レベル  
 レベル II : 日本の高校「英語 I・II」修了レベル  
 レベル III : 日本の高校「英語 Reading」修了レベル  
 レベル IV : 日本の高校「英語 Reading」修了レベル以上

読書学年は 0.1~4.2, 語彙習得学年は 1.7~2.8 の範囲に分布していて, YL0 では読書学年, 語彙習得学年ともに白 (レベル I) に評価された。一方, YL1 以上では, 読書学年では大半が薄グレーのレベル II と判定されたのに対して, 語彙習得学年では 1 冊を除いてその他すべてが白 (レベル I) と判定され, 両者に対する評価は異なった。両指標のスコアの相関係数を算出した結果,  $r=0.35$  であり, graded readers の場合では相関は低いものであった。語彙をコントロールしている, graded readers の場合は, 2 種類の指標はそれぞれ独自の基準にもとづいてテキストの難易度を分類していることがわかる。また, graded readers の 1 冊を除いてその他すべてが語彙習得学年の結果において白 (レベル I) と評価されていることから, graded readers は, 語彙の難易度が厳密にコントロールされていることもわかる。以上をまとめると, 米国 Reading 教科書の 3 年生を除いては, レベル I と II, すなわち日本の中学と高校教科書「英語 I・II」修了レベルの範囲内であることが判明した。また, 日本・中国・韓国・台湾の学校教科書では不足していた中学校教科書修了レベルの言語データが, graded readers の YL0 と YL1 によって補えることも確認された。

読書学年と語彙習得学年のレベル分布を明確にするため, Table 3 には, 本研究で調査した米国 Reading 教科書と graded readers に, 中條他 (2011) で調査した日本・

中国・韓国・台湾の学校教科書と散文のデータを追加した 4 種類の英文について, それぞれの構成レベルの比率とその実数を示した。Fig. 1 は 4 種類の英文について 2 つの指標のレベル分布を見やすいように図示したものである。Fig. 1 を見ると, 日本・中国・韓国・台湾の学校教科書と散文に比較して, 本研究で調査した米国 Reading 教科書と graded readers では, 白 (レベル I) と薄グレー (レベル II) の割合が多いことから, 語彙の観点から見て, 扱われている英文の難易度が低いことがわかる。さらに詳細に観察すると, 米国 Reading 教科書と graded readers の両者とも読書学年においては, レベル I, II の範囲内に属した。一方, 語彙習得学年の指標においては, 米国 Reading 教科書のうち grade 3 の教科書はレベル III に属することが判明した。このことから, 米国 Reading 教科書 grade 3 は, 高校 2 年生修了レベル (英語 I, II を学んだ学習者) を対象とするコーパステキストには難易度が高すぎるので, 初級者用のコーパステキストには含めない方が適切であることが明確になった。また, 日本・中国・韓国・台湾の学校教科書についても, 読書学年と語彙習得学年の指標においてレベル III・IV に評価される学年の教科書を初級者用のコーパステキストには含めない方が適切であると考え<sup>#16)</sup>。

Table 3 Comparing English Text Difficulty by Two Indices

	読書学年				語彙習得学年			
	レベル I	レベル II	レベル III	レベル IV	レベル I	レベル II	レベル III	レベル IV
米国 Reading 教科書	33% (3 冊)	67% (6 冊)	0% (0 冊)	0% (0 冊)	22% (2 冊)	56% (5 冊)	22% (2 冊)	0% (0 冊)
Graded Readers	50% (10 冊)	50% (10 冊)	0% (0 冊)	0% (0 冊)	95% (19 冊)	5% (1 冊)	0% (0 冊)	0% (0 冊)
東アジア 学校英語教科書	21% (6 冊)	68% (19 冊)	7% (2 冊)	4% (1 冊)	14% (4 冊)	64% (18 冊)	21% (6 冊)	0% (0 冊)
散文	0% (0 編)	43% (15 編)	11% (4 編)	46% (16 編)	6% (2 編)	26% (9 編)	49% (17 編)	20% (7 編)

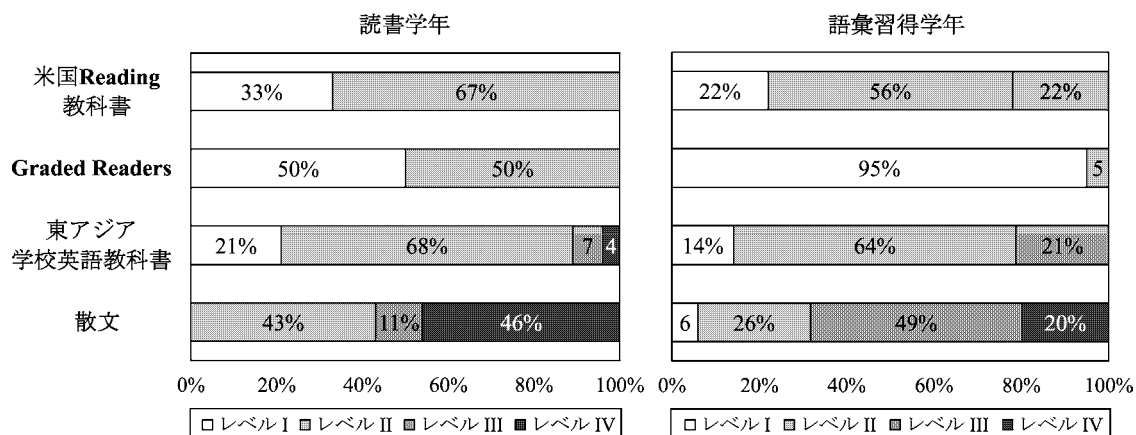


Fig. 1 English Text Difficulty by Two Indices

## 5. まとめ

本研究では、コーパスの教育利用を困難にしている原因の1つとなっている英語コーパステキストの難易度の問題を解決するための基礎的研究として、米国 Reading 教科書と graded readers の英文テキストの難易度の調査を行った。それによって、英語初級学習者向けのコーパス構築の際、コーパステキストとして活用するために適切なテキストの具体例の把握を試みた。

米国 Reading 教科書の初級学年（1, 2, 3 年）と graded readers（読みやすさレベル YL 0.0 から 4.0）の英文テキストについて、読書学年と語彙習得学年という2つの指標を用いてテキストの難易度を調査した。その結果、以下のことが導かれた。

- ・先行研究（中條他, 2011）<sup>48)</sup>で調査した日本・中国・韓国・台湾の学校英語教科書と散文のデータと比較して、今回調査した米国 Reading 教科書と graded readers の英文テキストの難易度が低いことが実証された。その結果、英語初級学習者の習熟度レベルに適したコーパステキストであること、日本・中国・韓国・台湾の学校英語教科書と散文データと併せて活用することで、より広範に日本人英語学習者を対象とすることができる教材作成用言語データを得られることが判明した。
- ・米国 Reading 教科書の1年生、2年生用の英文テキストは2指標ともレベル I・II の範囲であった。3年生用については語彙習得学年においてレベル III（「英語 Reading」修了レベル）と評価されたため、英語初級学習者向けのデータとしては難易度が高いことが判明した。
- ・本稿で調査した graded readers（YL 0 から 3）は2指標ともレベル I・II の範囲であり、英語初級学習者向けのコーパステキストとして使用可能である。

本研究の結果は、例えばコーパスを DDL に利用する際、学習者のレベルに適した難易度のテキストを収集するための基礎資料の1つとなると考える。実際の活用例として、たとえば、コンコーダンス・ラインをコンピュータ画面に出力して表示する際、検索するコーパステキストのレベルを I, II, III, IV のレベル別にラジオボタンで選択できれば、学習者の英語習熟度に対応した英文テキストを適切に選択して表示できる。このようなツールがあれば、英語指導者にとって、教材作成における適切なレベルの英文選択が容易になり、また、英語学習者にとっては、自分のレベルにあった例文を選択できるので文法・語彙における自律学習を支える学習ツールとして役立つであろう。

今回の調査では、英語の習熟度レベルが中学校教科書修了レベル、つまり中学校卒業レベル以上を対象として分析した。将来的には、初級レベルよりも低い中学修了以前を「入門レベル」として設定したコーパステキストの選定についても検討したいと考える。

今後、さらに外国語学習者の習熟度レベルを考慮した教育用テキストを広く収集し、英語初級学習者向け、さらには入門期学習者向けの教育用コーパスを構築する可能性を追求していきたいと考える。

謝辞：本研究の一部は平成 21-24 年度科学研究費補助金基盤研究 (B)（課題番号 21320107）を受けて行われました。

## 注

注 1) BYU-BNC: British National Corpus (BNC) is freely available online at <http://corpus.byu.edu/bnc/>.

注 2) Springer Exemplar is freely available online at <http://www.springerexemplar.com/>. Exemplar searches over 1,900 journals and close to 4,000 books from Springer's collection in all major subject areas including the life sciences, medicine, engineering, mathematics, computer science, business, and law, to find authentic examples of how a word or phrase is used in published literature.

注 3) The Corpus of Contemporary American English (COCA) is freely-searchable 425 million word corpus. COCA is available at <http://www.americancorpus.org/>.

注 4) The Professional English Research Consortium (PERC) is a 17-million-word corpus of copyright-cleared English academic journal texts in science, engineering, technology and other fields. Until the end of June, 2012, the PERC Corpus will be freely available at <http://scn.jkn21.com/~perc04/>.

注 5) 日英新聞記事パラレルコーパスを無料で検索できる2言語検索サイトが筆者らによって2012年公開予定である。

注 6) “While more proficient learners may be able to cope with this, those at an intermediate level, situated at B1 or B2 of the Common European Framework of Reference (Council of Europe 2001)<sup>49)</sup>, for example, are unlikely to be able to deal with the peripheral linguistic content of a



search from the BNC or other large corpus. The B1 learner, for example, is described as being able to deal with ‘high frequency everyday or job-related language’ (Council of Europe 2001 : 26), while the B2 learner can deal with more complex and lower frequency language provided ‘the topic is reasonably familiar’ (op. cit.). As the sample concordance lines from the BNC show in Figure 1, there is quite a high proportion of language on topics which are quite unfamiliar and far from everyday. “A further problem is presented by the length of sentences in most authentic text --- note that there are no complete sentences in the lines in Figure 1; this makes the cut-off nature of the concordance lines more difficult to deal with.” (Allan, 2009 : 24-25)<sup>50)</sup>

注 7) “Finding a suitable corpus proved to be the most difficult part of the assignment. The majority of the student teachers (61%) reported that they had been unable to find suitable corpora. Choice of topic and level of lexical difficulty were among the most frequently quoted reasons :

- ・ Suitable texts were very hard to find --- how can I make sure that the corpus I make includes language that I want to teach?
- ・ It was quite hard to find suitable texts which would fit into my exercises.
- ・ It was difficult to find corpora for beginners.
- ・ I couldn’t really find a suitable text for a corpus. The texts I saw on the internet were too difficult (newspaper!)” (Breyer, 2009 : 165)<sup>51)</sup>

注 8) 文部科学省は 2003 年に「英語が使える日本人のための戦略構想」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.ht](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.ht))を打ち出し、目標とする具体的な英語力の指標として、中学校卒業生の平均が英検 3 級程度、高等学校卒業生の平均が英検準 2 級～ 2 級程度の英語力を備え、大学卒業時には「仕事で英語が使える」英語力を達成するという目標を示した。小野他 (2005 : 104)<sup>52)</sup>の大規模な調査によると、「大学生に実施した結果では、国立大学の学生と私立の英文科のような英語の学習者中心となる学部の学生を除くと、英検 3 級または 4 級程度の英語力の大学生が半数以上在籍する大学が多いことがわかった。」このような「高等学校卒業生の平均が英

検準 2 級～ 2 級程度の英語力」という目標レベルに達していない英語が不得意な学習者、すなわち、大学における中・高の学習内容を再教育する必要性のある学習者を対象とした「レメディアル教育」の学習者も「英語初級学習者」に含まれると考えられよう。

注 9) Graded readers の‘authenticity’の問題に関して、lexical chunks の出現状況を BNC と Penguin graded readers で比較した Allan (2009)<sup>53)</sup>は以下のとおり、graded readers は真正な言語的特徴を含んでいるという結果を報告した。“The data may not be authentic, but it does contain authentic features.” (Allan, 2009 : 30) “Despite some differences, it is argued that the scale and type of lexical chunks are sufficient to provide input that reflects authentic language, suggesting that graded readers may offer an acceptable balance of accessibility and authenticity.” (Allan, 2009 : 23)

注 10) 古川昭夫 (2008) 「SSS 推薦・多読用基本洋書のご紹介」<http://www.seg.co.jp/ssss/review/osusume.html>

注 11) 中條他 (2011)<sup>54)</sup>に含められなかった韓国の Reading 教科書のデータは以下のとおりである。異語数 1,655 語、延べ語数 10,161 語、読書学年 4.6 年、語彙習得学年 4.4 年である。

注 12) “Terms like *USA*, abbreviations like *lbs*, numerics like *123*, symbols like *+*, and monetary amounts like *\$3.87* – all are treated as words. With this in mind, for readability evaluation purposes, it is normally a good idea to either select sample text that is absent such entries, or text that has had such edited out before using it in Readability.” (*Readability Calculations*, p.6)

注 13) “a score of 8.0 means that an eighth grader would understand the document” (“Readability and its Implications for Web Content Accessibility,” <http://wats.ca/resources/determiningreadability/1>)

注 14) 両資料に含まれない語の扱いには 2 種類の方法が考えられる。1 つは本研究のように Off List の語を 17 年生として計算して語彙習得学年に含める方法、もう 1 つは Off List の語を語彙習得学年の計算に含めないという方法である。本研究では、先行研究との整合性を図るために、前者の方法をとった。そのため、後者の方法よりも、語彙習得学年が、米国 Reading 教科書の場合、0.2 から 0.8

ポイント, graded readers の場合, 0.0 から 0.7 ポイント高く表示されている。

- 注 15) 2009 年版高等学校学習指導要領において, 科目の再編と新設がなされた結果, 「英語 I」「英語 II」「リーディング」が統合されて, 「コミュニケーション英語基礎」「コミュニケーション英語 I, II, III」になっている。
- 注 16) 今回, 指標に用いた読書学年と語彙習得学年の指標は英語母語話者を基準としたものである。母語話者にとっては, 身近で容易な語であっても, 英語を外国語として学ぶ日本の学習者にはそうした語彙を学ぶ機会は少なく (Chujo, Oghigian, Utiyama and Nishigaki, 2011)<sup>55)</sup>, 未知語となることも考えられる。外国語としての英語教育においては, 語彙の影響が大きいので, コーパステキストを選択する際には, そうしたことに対する注意や配慮も必要になるであろう (堀場, 2002)<sup>56)</sup>。

### 参考文献

- 1) Johns, T., Should You Be Persuaded—Two Samples of Data-driven Learning Materials, *ELR Journal*, 4, 1991, 1-16.
- 2) Stevens, V., Classroom Concordancing: Vocabulary Materials Derived From Relevant, Authentic Text, *English for Specific Purposes*, 10, 1991, 35-46.
- 3) Johansson, S., Some Thoughts on Corpora and Second-language Acquisition, in Aijmer, K. (ed.), *Corpora and Language Teaching*, Amsterdam, John Benjamins Publishing Co., 2009, 33-44.
- 4) Braun, S., From Pedagogically Relevant Corpora to Authentic Language Learning Contents, *Recall*, 17(1), 2005, 47-64.
- 5) Breyer, Y., My Concordancer: Tailor-made Software for Language Learners and Teachers, in Braun, S., Kohn, K., and Mukherjee, J. (eds.), *Corpus Technology and Language Pedagogy (New Resources, New Tools, New Methods)*, Frankfurt am Main, Germany, Peter Lang, 2006, 157-276.
- 6) Breyer, Y., Learning and Teaching with Corpora: Reflections by Student Teachers, *Computer Assisted Language Learning*, 22(2), 2009, 153-172.
- 7) Granath, S., Who Benefits from Learning How to Use Corpora, in Aijmer, K. (ed.), *Corpora and Language Teaching*, Amsterdam, John Benjamins Publishing Co., 2009, 47-65.
- 8) Boulton, A., Data-driven Learning: Taking the Computer out of the Equation. *Language Learning*, 60(3), 2010, 534-572.
- 9) Oghigian, K. and Chujo, K., An Effective Way to Use Corpus Exercises to Learn Grammar Basics in English. *Language Education in Asia*, 1, 2010, 200-214.
- 10) Anthony, L., Chujo, K. and Oghigian, K., A Novel, Web-based, Parallel Concordancer for Use in the ESL/EFL Classroom, in Newman, J., Baayen, H. and Rice S. (eds.) *Corpus-based Studies in Language Use, Language Learning, and Language Documentation*, Amsterdam/New York, Rodopi Press, 2011<sup>a</sup>, 123-138.
- 11) Nishigaki, C., Amano, K., Minegishi, N. and Chujo, K., Creating a Level Appropriate Corpus and Paper-Based DDL for the High School L2 Classroom, in Akasu, K. and Uchida, S. (eds.) *ASIALEX 2011 Proceedings, LEXICOGRAPHY: Theoretical and Practical Perspectives*, 2011, 396-405.
- 12) Anthony, L., Chujo, K. and Oghigian, K., A Freeware, Open-Source, Web-Based Framework for Distribution and Analysis of Single and Parallel Corpora, Paper presented at the Corpus Linguistics Conference 2011, University of Birmingham, UK, 2011<sup>b</sup>.
- 13) Oghigian, K. and Chujo, K. (2010), 前掲論文.
- 14) Oghigian, K. and Chujo, K., Corpus Informed Writing for Science and Engineering, *Journal of the College of Industrial Technology*, Nihon University, 45, 2012, in press.
- 15) Allan, R., Can a Graded Reader Corpus Provide 'Authentic' Input? *ELT Journal*, 63(1), 2009, 23-32.
- 16) Breyer, Y. (2009), 前掲論文.
- 17) 中條清美, 白井篤義, 内山将夫, 西垣知佳子, 長谷川修治, 「日英パラレルコーパスを構成するテキストの難易度分類に関する研究」, 『日本大学生産工学部研究報告 B (文系)』, 37, 2004, 57-68.
- 18) Chujo, K., Utiyama, M. and Nishigaki, C., Towards Building a Usable Corpus Collection for the ELT Classroom, in Hidalgo, E., Quereda, L. and Santana J. (eds.), *Corpora in the Foreign Language Classroom*, Amsterdam, Rodopi, 2007, 47-69.
- 19) Chujo, K. and Utiyama, M., Selecting Level-specific Specialized Vocabulary Using Statistical Measures, *System*, 34(2), 2006, 255-269.
- 20) 中條清美, 西垣知佳子, 山保太力, 天野孝太郎, 「英

- 語初級者向けコーパスデータとしての教科書テキストの適性に関する研究』、『日本大学生産工学部研究報告 B (文系)』, 44, 2011, 13-23.
- 21) 米山朝二, 『英語教育指導法事典』, 東京, 研究社出版, 2003.
- 22) 中條清美, 西垣知佳子, 山保太力, 天野孝太郎(2011), 前掲論文.
- 23) 中條清美, 内堀朝子, 西垣知佳子, 宮崎海理, 「コーパスを利用した基礎文法指導とその評価」, 『日本大学生産工学部研究報告 B(文系)』, 42, 2009, 53-65.
- 24) 西垣知佳子, 中條清美, 木島綾子, 「パラレルコーパスを利用した英語上級者用データ駆動型英語学習の実践の試み」, 『千葉大学教育学部研究紀要』, 58, 2010, 279-286.
- 25) 西垣知佳子, 天野孝太郎, 吉森智大, 中條清美, 「中・高生のためのコンコーダンス・ラインを利用したデータ駆動型英語学習教材の開発の試み」, 『千葉大学教育学部研究紀要』, 59, 2011, 81-86.
- 26) 西垣知佳子, 峰岸識子, 中條清美, 「中学・高校の英語教育におけるデータ駆動型学習に基づく帰納的学習の実践的研究」, 『千葉大学教育学部研究紀要』, 60, 2012, 22-28.
- 27) 投野由紀夫, 「コーパスを英語教育に生かす」, 『英語コーパス研究』, 10, 2003, 249-264.
- 28) Allan, R. (2009), 前掲論文.
- 29) 中條清美, 西垣知佳子, 山保太力, 天野孝太郎(2011), 前掲論文.
- 30) 古川昭夫, 神田みなみ, 『英語多読完全ブックガイド [改訂第2版]』, 東京, コスモピア, 2007.
- 31) 中條清美, 西垣知佳子, 山保太力, 天野孝太郎(2011), 前掲論文.
- 32) 内山将夫, 高橋真弓, 「日英対訳文対応付けデータ」, 2003. <http://www2.nict.go.jp/x/x161/members/mutiyaama/align/index.html>
- 33) 内山将夫, 井佐原均, 「日英新聞の記事および文を対応付けるための高信頼性尺度」, 『自然言語処理』, 10 (4), 2003, 201-220. <http://www2.nict.go.jp/jt/a132/members/mutiyaama/jea/>
- 34) Chujo, K., Utiyama, M. and Nishigaki, C. (2007), 前掲論文.
- 35) Chujo, K., Utiyama, M. and Nishigaki, C. (2007), 前掲論文.
- 36) 中條清美, 西垣知佳子, 山保太力, 天野孝太郎(2011), 前掲論文.
- 37) 高梨庸雄, 卯城祐司, 『英語リーディング事典』, 東京, 研究社出版, 2000.
- 38) 中條清美, 白井篤義, 内山将夫, 西垣知佳子, 長谷川修治 (2004), 前掲論文.
- 39) Micro Power and Light Co., *Readability Calculations*, 2003.
- 40) Flesch R., *The Art of Readable Writing*. New York, Harper and Row, 1974. (as cited in Smith, C.R. and Smith, C.A. Patient Education Information : Readability of Prosthetic Publications, *Journal of Prosthetics & Orthotics*, 6(4), 1994, 113-118.)
- 41) McLaughlin, G., SMOG Grading : A New Readability Formula, *Journal of Reading*, 12(8), 1969, 639-646.
- 42) Fry, E. B., A Readability Formula That Saves Time, *Journal of Reading*, 11(7), 1968, 265-271.
- 43) 中條清美, 西垣知佳子, 山保太力, 天野孝太郎(2011), 前掲論文.
- 44) Dale, E. and O'Rourke, J., *The Living Word Vocabulary*, Chicago, World Book-Childcraft International, Inc., 1981.
- 45) Harris, A. J. and Jacobson, M. D., *Basic Elementary Reading Vocabulary*, New York, The Macmillan Company, 1972.
- 46) Hiebert, E. H., and Kamil, M. L., *Teaching and Learning Vocabulary*, Mahwah, NJ, Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, 2005.
- 47) 中條清美, 西垣知佳子, 山保太力, 天野孝太郎(2011), 前掲論文.
- 48) 中條清美, 西垣知佳子, 山保太力, 天野孝太郎(2011), 前掲論文.
- 49) Council of Europe, *Common European Framework of Reference for Languages : Learning, Teaching, Assessment*. Cambridge : Cambridge University Press, 2001. (as cited in Allan, R., Can a Graded Reader Corpus Provide 'Authentic' Input? *ELT Journal*, 63(1), 2009, 23-32.)
- 50) Allan, R. (2009), 前掲論文.
- 51) Breyer, Y. (2009), 前掲論文.
- 52) Allan, R. (2009), 前掲論文.
- 53) 小野博, 村木英治, 林則生, 杉森直樹, 野崎浩成, 西森年寿, 馬場真知子, 田中佳子, 國吉丈夫, 酒井志延, 「日本の大学生の基礎学力構造とりメディア教育」, 『NIME 研究報告』, 独立行政法人, メディア教育開発センター, 2005.
- 54) 中條清美, 西垣知佳子, 山保太力, 天野孝太郎(2011), 前掲論文.
- 55) Chujo, K., Oghigian, K., Utiyama, M., and Nishigaki, C., Creating a Corpus-Based Daily Life Vocabulary for TEYL, *Asian EFL Journal*,

49, 2011, 30-59.

- 56) 堀場裕紀江, 「アセスメント」, 『英文読解のプロセスと指導』(津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ

編), 東京, 大修館書店, 2002, 243-265.

(H 24. 2 .10 受理)

Appendix Selected English Books

米国 Reading 教科書			
シリーズ名	タイトル	著者	出版地, 出版社
Houghton Mifflin Reading 1-1	Here We Go!	Cooper, J.D. & Pikulski, J.J.	Boston, Houghton Mifflin Company, 2005
Houghton Mifflin Reading 1-2	Let's Be Friends		
Houghton Mifflin Reading 1-3	Surprises		
Houghton Mifflin Reading 1-4	Treasures		
Houghton Mifflin Reading 1-5	Wonders		
Houghton Mifflin Reading 2-1	Adventures		
Houghton Mifflin Reading 2-2	Delights		
Houghton Mifflin Reading 3-1	Rewards		
Houghton Mifflin Reading 3-2	Horizon		
Graded Readers			
シリーズ名	タイトル	著者	出版地, 出版社
Oxford Reading Tree Stage 4	House for Sale	Hunt, R.	Oxford, Oxford University Press (以下, O.U.P.), 2003
	The New House		
	Come In!		
	The Secret Room		
	The Play		
	The Storm		
	Nobody Got Wet		
	The Weather Vane		
	Poor Old Mum!		
	The Wedding		
	The Camcorder		
The Balloon			
Longman Literacy Land Story Street Step 4	Billy's Baby	Alexander, J.	Harlow, Pearson/Longman, 2000
	Ben Gets Cross	Alexander, J.	
	Story Time with Mick	Alexander, J.	
	The Missing Shoes Part 1	Umansky, K.	
	The Missing Shoes Part 2	Umansky, K.	
	Ben and the Pop Star	Strong, J.	
	Spock the Donkey	Strong, J.	
	Moon Adventure	Umansky, K.	
	Rope that Cow!	Umansky, K.	
Longman Literacy Land Story Street Step 4	Double Trouble	Wright, C.	Oxford, O.U.P., 2010
	Super Sam	Wright, C.	
	Candy For Breakfast	Brooke, R.	
	Lost!	Martin, J.	
	A Visit to the City	Rose, M.	
	Matt's Mistake	Taylor, D.	
	Numbers, Numbers Everywhere	Northcott, R.	
	Circles and Squares	Brooke, R.	
Puffin Easy-to-Read Level 1	How Big Is Big?	Ziefert, H.	N.Y., Puffin Books, 1989
	When The TV Broke		
	Harry Takes a Bath		N.Y., Puffin Books, 1993
	Jason's Bus Ride		
	Harry Gets Ready for School		

Graded Readers			
シリーズ名	タイトル	著者	出版地, 出版社
	Harry Goes To Day Camp		N.Y., Puffin Books, 1994
	Nicky Upstairs and Down		
	Cat Games		N.Y., Puffin Books, 1995
Oxford Reading Tree Stage 5	A New Classroom	Hunt, R.	Oxford, O.U.P., 2003
	The Magic Key		
	Pirate Adventure		
	The Dragon Tree		
	Gran		
Oxford Dolphin Readers Level 3	Student in Space	Wright, C.	Oxford, O.U.P., 2010
	What Did you Do Yesterday?	Martin, J.	
	New Girl in School	Lindop, C.	
	Uncle Jerry's Great Idea	Shapiro, N.	
	Just Like Mine	Northcott, R.	
	Wonderful Wild Animals	Kenshole, F.	
Cambridge Storybooks 3	Dad Goes Fishing	Rose, G.	Cambridge, Cambridge University Press, 2004
	The Flying Football	Crebbin, J.	
	Dancing to the River	Hallworth, G.	
	Apples!	Crebbin, J.	
	Nishal's Box	Prater, J.	
	The Lion and the Mouse	Rose, G.	Cambridge, Cambridge University Press, 2001
Puffin Easy-to-Read Level 2	Hamster Chase	Suen, A.	N.Y., Puffin Books, 2002
	The Pizza That We Made	Holub, J.	N.Y., Puffin Books, 2001
	What a Trip, Amber Brown	Danziger, P.	
	The Three Little Pigs	Ziefert, H.	N.Y., Puffin Books, 1995
	Young Cam Jansen and the Baseball Mystery	Adler, D.	N.Y., Puffin Books, 1999
	The Snow Child	Ziefert, H.	N.Y., Puffin Books, 2000
Oxford Bookworms Factfiles Stage 1	Kings and Queens of Britain	Vicary, T.	Oxford, O.U.P., 1997
	Scotland	Flinders, S.	Oxford, O.U.P., 1998
Oxford Bookworms Library Stage 1	Sherlock Holmes and the Sport of Kings	Conan, A. & Doyle, S.	Oxford, O.U.P., 2005
Penguin Readers Level 2	Mr Bean in Town	Atkinson, R., Curtis, R., Driscoll, R. & Clifford, A.	Harlow, Pearson Education Limited, 2001
Cambridge English Readers Level 2	Logan's Choice	MacAndrew, R.	Cambridge, Cambridge University Press, 2000
Oxford Bookworms Library Stage 2	Return to Earth	Christopher, J.	Oxford, O.U.P., 2000
Oxford Bookworms Library Stage 3	Chemical Secret	Vicary, T.	
Penguin Readers Level 3	Emil and the Detectives	Kastner, E.	Harlow, Pearson Education Limited, 2001
Penguin Readers Level 3	Dangerous Game	William, H.	
Oxford Bookworms Library Stage 4	The Thirty-Nine Steps	Buchan, J.	Oxford, O.U.P., 2000